

我國に於ける西洋史研究の態度について

村松 恒一 郎

一

我國に西洋史學が移植せられてから既に數世代を経て、その間に於ける斯學の進歩には大に見るべきものがあるとはいへ、しかも吾々の西洋史學に對する立場如何の問題については、從來先進の學者のこれについて教へる所は甚だ乏しく、事實この問題に關しては、學者の間に猶充分の考察と理解との缺けたる恨みがなくもないのである。西洋史の移植せられた當初にあつては、このやうな問題は猶これを提出する必要がなかつたであらう。新しい文化の輸入、從來知られなかつた諸外國との接觸交通は、必然にそれ等の國々の過去現在の事情、それ等の國々のもつ文明についての知識を必要ならしめる、のみならず、それ等の國々のもつ諸文化は、我國にとつて先進の文化であり、我國が採つて以て直ちに實地に應用すべきやうの手本であつた。このやうな事情の下にあつては、西洋史學に對する學者の内

面的な立場の如きは勿論問題ではない、外面的な西洋史的知識の功利性が、我國に於ける西洋史研究を意義づけるのに既に充分であつた。このやうな任務が大體に於て一段終つた後に於ても、西洋史學の功利性は更に別の意味に於て重要な意義をもつてをつた、即それが西洋文化以外の文化を對象とする史學に對しても、既に大に完成せられた方法と概念とを提供する意味に於て。この意味に於て、東洋の諸文化を研究するものにとつても、西洋史學の一通りの研究が必要不可欠の前提要件であつた、それは吾々の何人もが周知のことであり、改めて例を以てこれを證明する必要はないであらう。しかし乍ら今日に於ては、このやうな西洋史學の外面的な任務は殆ぼ完了せられたといつてよいと思ふ。今や吾々は、以上のやうな外面的な意味からではなしに、内面的に西洋史の研究が吾々にとつて何を意味するかを反省すべく餘儀なくせられてをる。従來の學者がこの點について吾々に教ふる處の乏しいのは、それ故に敢て怪しむに足らないのである。それは今日の吾々に改めて課せられた問題であるからである。

勿論ここではこのやうな問題を、すべての方向に互つて充分に論ずる暇はない。自分は唯差當つて特に考慮を要するやうな諸點を項目的に擧げるに止める。第一には自分は我國に於ける西洋史の研究が、他の科學のそれとは異なつた、特別の困難を有する事に注意を惹きたいと思ふ。他の諸科學と雖も勿論、先に西洋史學について述べたと同じやうな外面的な研究時代を過去にもつてをつた。それ等も亦翻譯書や翻譯書書の時代、或は研究の方法や概念に於て、全然外國學者の指導に依據した時代をもつてをつた。しかし今日に於ては、それ等の科學の對象とする所の事象は、或は移植せられて後、久しきを経て既に大いに内國化し、或は昔から在つた研究領野が既に手を著け得るまでに開拓せられて、何れも國內に於て独自の研究を遂行せしむるに充分な基盤をこれに提供してをる。それ等の諸學問はいはゞ、

自家の畑を既に備へてをる。しかるに、西洋史學者のみは、その科學の性質上、猶常に他家の畑の上に勞働すべく餘儀なくせられてをる。そこに自分は、他の諸科學にとつてとは異なる、西洋史學にとつての根本的な困難が横つてをると思はざるを得ないのである。

二

勿論西洋史學の對象を以て、他家の畑とは考へず、等しくこれを自家の畑視する人々にとつては、この種の困難は最初から存在しない。そのやうな人々が、東洋・西洋、内國・外國の區別を越へて、等しく西洋史學界なる第三帝國の住人として、共同の研究に従事するといふ立場は確かに可能である。但し事實上の問題としては、我國にあつて、相隔ること遠い西歐の史實を研究するといふ事態自身の無理が著しくこの立場を制限する事はこれを否み得ない。第一に吾々は據るべき事實、用ふべき史料の不足に苦しまねばならぬ。もとよりこのやうな唯々外面的な事情に基く困難は、特に有利な機會と境遇とを恵まれた者に於ては、大なる程度までこれを除き得る、問題によつては我國に於て却て、西歐學者の見る可らざる史料を見出し得る場合もある、然らざる場合に於ても、それは要するに程度の問題であり、我國に於ける西洋史研究を本質的に條件づける程のものではない、とも云ひ得る。併し通常の場合としては、我國の西洋史研究者が最も直接且切實に當面しなければならぬ困難が、恰もこの點に存する事もこれを否み得ない。第二に、我國に於て西洋史の研究を行ふ者は、常に史料の利用に於てのみならず、更にそれらの史料に對する理解力

の點に於て重要な不足を感じる。蓋し西歐文化の中に生ひ育つた者は、彼等の父祖或は彼等自身が生み出した過去の文化に對しては、一種の自然的な理解力を備へ、恰も吾々が自己の過去に於ける經歷・行爲を反省する際に、過去の日の自己に對して感ずるのと同じ一種の自明的な感情を以て、彼等自身の文化を理解し得るのに反して、我國の西洋史學者にとつては、このやうな理解力は當然に始めから缺けてをるのである。勿論嚴密にいへば彼にあつて吾に缺けてをるものは、そのやうな自然的な能力とか感情とかいふものではない、寧ろ彼等西歐人が日常その中に生活する間に、彼等の文化の各般の事實、限りなく多様微細な諸事實について不知不識の間に得た知識や、それらの事實と彼等の父祖の日の事實との間に存する事實上の親和關係が、それらの事實に對する彼等の理解を大に助け、所謂自明的な感情、無意識の中に行はれる理解作用に伴ふあの感情をも生み出すのであらう。從て民族を異にし、生國を異にする者と雖も、西歐の文化、西歐の生活事實に親しむ事深きを加ふるに從て、彼等西歐人のそれと同じところの理解力をも亦獲ち得べきはずのものであり、以上のやうな第二の困難も結局は程度の問題に歸し得るとも云ひ得られるのである。但し通常の場合にあつては、この種の困難が我國に於ける西洋史研究を事實上大に制限する事は等しく亦これを疑ひ得ない。

この彼我の間に存する理解力の相違の問題は、しかし乍ら、吾々が更に第三の觀點を導き入れるに從つて、更に第三の事實上の困難を我國に於ける西歐史研究者の前に提出する。蓋し歴史家は常に純粹客觀的に、ある事實の構成的、或は因果的關聯を確定し理解する以上に、更に彼はそれらの事實が彼に對してもつ特殊な歴史的意味を理解しなければならぬ。換言すれば歴史家は單に事實を事實として確定する丈では猶その任務を完了しない、寧ろ彼の注意をそれ

らの事實の上に注がしむる動機を彼自身のため、又彼の讀者のために明にせねばならぬ。このやうな動機は、彼がそれらの事實を含む過去の歴史的文化、否、終局に於てはこのやうな過去の歴史的文化の連続である彼の現在の歴史的世界に對して直接間接に一定の價值意識を有し、それらの事實が直接間接に彼にとつて價值あるかゝる歴史的世界を支ふるものとして、彼にとつて特殊の意義を有する所に存するのである。事實は事實自體としてではなく、寧ろそれが一定の歴史の意味を以て、その歴史家の歴史的世界の關聯の中に組入れらるべき事によつて、知るに値ひするものとなるのである。彼は一つの事實の事實的關聯以上に、その事實の意味關聯を理解しなければならぬ。さて、ここに提出せられた新しい理解の領野に於ても、先に自分が述べた所謂自然の理解力、自明の感情の關係は同様に適用せられる。我國に於ける西洋史研究者が事實上、西歐の學者に比してこの點大なる遜色を示す事は、これを否むべくもない。しかもこの第三の關係に於ては、彼等の擔ふべき困難は決して單に程度上の差別丈に止まつてゐない。寧ろそこではより本質的な困難が彼等を待ち設けてゐる。

科學としての歴史學は何よりも先づ忠實な事實研究から出發せねばならぬ、正確な事實の批判確定がそれ以上のあらゆる歴史研究の不可缺の基礎でなければならぬ、これらの點を認容するに於て、自分は何人の背後にも落ちぬ者である。しかもこのやうな事實研究の段階は、それ自らとしては、本來の歴史學に素材を提供する丈の意味を有するものであり、歴史研究の準備的な第一步をしか意味せぬといふ事も、我々は決して忘れてはならぬ。それ等の事實が一つの歴史的事實となるためには、常にその歴史家の歴史的主觀に結びつけられ、彼にとつて一定の意味をもつ歴史的事實の關聯の中に組入れられねばならぬ。歴史的概念のこの意味に於ける主觀性は、何人もこれを否定することは出来ない。

但しこのやうな歴史的概念の主観性は、決して、その歴史家が任意にその好む處にまかせて彼の歴史的地位をとり得るといふことを意味するものではない。彼が科學者として、彼の業績に科學的妥當性を要求する限り、彼がある事實に對して與へる歴史の意味は、その事實の事實性に適合せねばならず、彼が結局に於てそこから各個事實に對する意味を導き來る彼の過去並びに現在の文化に對する價值意識は、それらの文化に對して何人もが認める所のもの、若くは結局に於て何人にもこれを認めしめ得る底のものでなければならぬ。具體的にいへば、學者はその研究に於て常に一方には事實が事實として教へる所により、他方に於ては彼が屬する社會の共通な文化意識、或は彼が屬する學界の共通な問題の視點によつて支配せられてをるのである。従て一つの社會が安定し、何人もがその社會の戴く文化の價值について共通の信頼を有するやうな時代、學界についていへば、そのやうな社會的安定に幸せられて、學者が安んじて學術の世界に専心し得るといふやうな時代にあつては、終局に於て學者を導く文化意識、彼等の問題の視點はいはゞ何人にも自明な事として前提せられ、精神的に素朴な學者にあつては屢々そのやうな前提すらも忘れられて、事實の故に事實を追ふことが唯一の任務として考へられるのである。しかも事態は決してそうではない事、學者がその學術世界に専念し、専ら事實の上に彼の學說を打立てるといふやうな場合にも、彼が意識的無意識的に彼をめぐる社會の響導的思潮によつて支配され指導されてをること、これらのことは、學說と社會思潮との間の關係を一度研究した程の何人もが直ちに首肯し得るところのものである。そのやうな場合には學者は彼等のとるべき立場、彼等の問題の視點を無意識的に理解してをるのである、そしてこの限りに於ては、先にも述べたやうに、民族を異にする他國の學者と雖も、假令程度の差こそあれ、努めて止まぬならば、そのやうな理解に近づき得るといふ事は疑ひがない。

しかるに一つの社會が精神的不安定の時代にある場合、その中のある人々が彼等の現在の文化に對し、遡つてはその前段階である過去の文化に對して懐く價值意識と、他の一群の人々のそのやうな價值意識との間に重大な相違が存する場合、一言でいへば、同一の社會内に、數多くの異なつた歴史的世界觀が相並むで、互に相争ふといふやうな時代に於ては、問題はしかく簡單ではない。そのやうな時代には、精神的に素朴な學者にも自ら研究指針を與へてくれるやうな、學界共通の問題の視點といふものはない。學者は各々自ら自己の力により、獨立の信念によつて、彼自身の歴史の立場を定めねばならない。學者は從來住みなれた、ある程度まで現實生活から遊離した第三帝國的な學界から出でて、今一度現實生活の中に行はれる價值鬭争の巻に立ち、そこから彼の現實の生活に對する態度、惹いてはそのやうな生活を支へる歴史的文化の全關聯に對する態度を定めねばならぬ。彼は今や航路の定まつた大船に安座してゐるのではない、自ら舵を操つて自己の行く手を定めねばならないのである。

このやうな歴史的文化に對する異なつた價值意識の對立、鬭争といふ現象は、恰も西歐文化の一つの特性をなすものである。それはその中に起源を異にし性格を異にする數々の文化要素を含むでをる、豫言者の時代更には新約の時代に最後の形體をとつて來る古代ヘブライの文化、古典的希臘文化、羅馬的ヘレニズム的な古代帝國の文化、更には近代西歐文化の直接の母胎であるゲルマン的中世の文化、それらのものは何れもその特有な文化遺産と特性的な Ethos とを以て、相合して一つの西歐文化、歐州的なるものの基柱をなしてをる。それらの何れの二つも決して同じやうな方向、同じやうな性格を有するものではない、むしろそれらのものは多くの點に於て、相互に恰も正反對の方向を内に包藏する。それらの中の一つが、非合理的な、しかも唯一の價值として絶對の信仰と服従とを要求するとこ

ろの、大なる意思の前に各個の個人性を否定し没却することによつて、却て普遍的な限りなく深い倫理的感情を生み出す時、それらの他の一つは、各人各々その理性によつて圓滿具徳の價値世界に參與し得べく、また參與すべき事を教へて、同様に亦限りなく高い普遍的な倫理的感情を生み出す。第三の者が、より外面的な、組織と權力とによつて大いなる社會的建築を築き上ぐる術を教ふる時、第四の者は反對により内面的な自由と團體的精神とによつて、同じやうに緊密な社會的建築が築かるべき事を教へる。このやうな異種の諸文化、異種の生活精神が結合せられ、互に他を批判し相争ふといふ特殊の關係こそ、確かに、西歐文化のみに特有なあの生活の複雑性と緊張性、世界觀の反對對立とこれを克服綜合しやうとする努力、そこから止むに止まれぬ力で起つてくるあの内面的發展、すべてそれらのことを規定する根本的なものである。西歐文化はその中に互に相闘ふべき力、互に反撥すべき世界觀の種子を含むでをる。そこではそれらの諸要素は常に新に綜合せられねばならぬ、しかも亦それらは常に新たな形で分裂する。歴史が反對と綜合の波をうつ、一つの綜合によつて前の綜合が克服され、より高い次元に迄持ち來され、所謂歴史が發展する。歴史の發展的な進行、従つて亦發展史的な歴史觀は確かにこのやうな内面的條件をもつ西歐文化の特性的產物である。

具體的にいへば、それらの諸要素は、中世の教會文明に於て、假令内部的には極めて非統一的、非緊密的ではあつたにしても、とにかく一つの綜合的形態を興へられ、一つの文化時代を形づくるのであるが、中世末期から近代初頭にかけて、諸國民の内部的力が漸く成熟すると共に、從來實質的ではなく寧ろ外部的に、單に教への上で結合せられてゐた諸要素が夫々の力とそれ／＼の形をもつて、そのやうな束縛を破つて自己を主張して來る。十五世紀並びに

十六世紀初葉に亘る近世初頭の獨創と混亂の時代がこれに當る。傳統的權威に反抗する自由な自然科學的研究の先驅者、人間理性の唯一の基礎の上に夫々獨創的體系を組立てる近代的哲學の先驅者、個々人の魂の底から湧く宗教的熱情の解放と現状打破の運動、新しい美術、新しい國家治道、すべてそれらのものが獨創的なものの力強さと革命的熱情とを以て舞臺に飛び出て來る。しかるに早くも十六世紀の二十年代——三十年代に時代の趨勢は再び大なる轉向を示して來る。それらの新しく生れた理念が今一度現實の坩堝に投入せられる、新しい理念がよき果實を結ぶためには、それらは今一度現實の勢力、即過去の時代から傳統せられた要素と結びつけられ、それらに打ち克ち、或はそれらの中に攝取されねばならぬ、奔放と混亂の中から生れた新しいものが漸く冷靜に現實の事情を反省し、實踐的に自己を建設しやうとし始める。ある意味に於て反動的であり、しかもより大なる意味に於て極めて建設的な時代が始まる、十六世紀後半から十七世紀にかけての反宗教改革の時代、或は諸宗派の時代がそれである。近代的諸國家が内亂或は革命を経て、最終的に確立した形態をとる時代、諸派の哲學が漸く體系を形づくる時代、近時に至つてその建設的意味が次第に認容されるに至つたバロック藝術の時代がそれである。そこでは周知のやうに、一旦戰線から打退けられたかに見へた中世的要素、殊にはすべてを超越的宗教的な價值にかけて、そこからあらゆる現世的事實を判斷しやうといふあの中世文化の中心的精神が、再び力強く復活する、しかもそれは從來のやうに單に外面的に教會の教へによつて教へられたものとしてではなく、今や内面から湧く信念として個々人の生活を力強く支配する、いはゞそれは大に個人化され内面化され、從て各個人或は個人の團體が何をそのやうな窮極の價值として認めるかに従つて、それらの間に眞鍮な生活目標に關する鬭争、世界觀の争ひが惹き起される。他方そのやうな争ひの結果一つの生活、一つの世界

觀が確立せられた場合には、それは中世のそれに比して遙かに大きな内面的緊密性と統一性を具有するに至る。即前の時代に分裂崩壊した諸文化要素はこの時代に再び綜合統一せられるが、今やその綜合は中世の教會文化に於てのやうに單一的統一ではあり得ず、少くとも前述の意味の生活鬭争、世界觀の鬭争が社會的現象としてその中で闘はれ、やがて解決せられた諸國民毎にその綜合の課程、從て出來上つた新しい綜合文化が異なつて來る。即夫々他と異なつた特性をもつ諸國民の文化がそこに成立する。從來殆ぼ同一類型に屬した英佛の二國家は十七世紀の間に全く異つた型の二つの國家となる、清教派の運動は從來の「朗らかな英國」の中から今日の嚴肅主義的な英國國民氣質を生み出し、同様にルーター派の宗教運動が今日の獨逸人氣質を作り上げる。新らしい綜合は中世的、外面的、單一的の代りに、近代的、内面的、多元的となる。

十八世紀は前時代の建設作業が一段落を告げた安定的時代である。一方には從來具體的な生活の背景の上に建設せられた諸國民文化が、具體的生活の安定と共に、次第にこのやうな具體的關心から切り離され、いはゞ精神的文化として抽象されてくる、殊には西歐文化の最も有力な一要素である合理主義的思考がこの趨勢を大に促進して、諸國民に共通な一つの精神的な西歐文化を形成する。所謂啓蒙文化なるものこれである。他方前時代に異種の文化要素が、勿論決して矛盾なしにはなしに、結合され統一さるゝに至つた際に、決定的動機をなした具體的事情の必然性、具體的生活の必要に對する關心が漸く薄れて、事態を事態自身として觀察するに至れば、自ら矛盾が矛盾として眼についてくる、合理主義的思考や批判を重んずる時代の精神がこれに拍車をかける。その結果は各人の間に既成文化に對する不満不足の念が自ら生み出され、傳統を無視する獨創的思想、傳統に對する反抗が醸成され、やがては再び傳統

文化の崩壊、諸要素の分裂、獨創と混亂の時代へと轉向する、十八世紀の末葉、佛國革命を中心とする時代が即それである。これにつづいて十九世紀の初頭三十年に互る反動的建設的時代、殆ぼ千八百七十年を境とする比較的安定的な時代、そしてそれに續き最後に世界戰爭を契機として十九世紀文化の崩壊する時代、それらの事象、それ等の經過は今日何人もが承知の事である。このやうな歴史的回顧は、吾々が前に述べた安定的時代なるものが極めて短かいこと、その他の時代に於ては西歐文化を内面的に規定する異種の文化要素が、近代に於てはその上に更に、互に異なつた各國民の文化の傳統、或はその性格とも呼ばれるべきものが、互に對立し、夫々自己の世界觀のために争ふのが現實の事態であること、殊にそれは傳統的文化が崩壊し、新しい文化時代が將に誕生しやうとする獨創と混亂の時代に於て特に著しいこと、それらの事を吾々に教へるに充分である。そして吾々が現在その最後に擧げた時代の眞唯中に在ること、これについては何人と雖も異論のあるはずはない。今日に於てはあらゆる異なつた世界觀が夫々、彼等にとつてはそうであつて、それ以外ではあり得ない形ちに於て過去の歴史的文化を理解し、その上に現在の彼等の立場をとり、それに従つて明日のプログラムを定め、各々が何れも明日の勝利を目指して相争つてをる。このやうな時代にあつては、所謂學者のみがびとり事實のための事實の歴史、所謂純客觀的な歴史の世界に安んじやうとしても、それは事實上不可能である、蓋しそのやうな場合實は彼等が暗黙の中に前提してをる學界共同の問題指針などはかゝる時代にはあり得ないからである。學者は自ら現實に反應し、そこから彼の歴史的立場を定め、問題を自ら作らねばならない。勿論ここにいふ現實反應の要求は決して學者に互に相争ふ諸黨派の何れかに濫りに味方し、現實的意思の前には科學的客觀性をも犠牲にすべき事を求むるものではない。寧ろ科學が科學として現實に貢獻し得る唯一の道は、

夫々の現實的意思が自己を規定する際に安じて據り得る底の客觀的知識をこれに提供する點に存するのである。科學としての西歐史研究は、現在に至る迄の西歐文化の發展を客觀的に嚴正正確な事實の上に理解し、これによつて吾々現在の文化の立脚點を定め、よつて又明日に於けるこの文化の進むべき行手の見通し、この文化の發展し得べき可能方向を教へねばならぬ。それは互に相争ふ現在の諸世界觀の本質をば、その由來にかけて嚴密正確に確定し、それらのもつ意味、それらが當然受くべき制限をこれに知らしめねばならぬ。しかもそれらの諸世界觀、或は明日これと同様の意味をとり來るやうな猶かくれた歴史的要素を見出し、そこに問題をとり上げる點に於ては、それは多分に學者の主觀性にかゝつてをる。問題の解決、これが前提をなす事實研究に於ては學者は何處までも科學的客觀性を固持しなくてはならぬ、しかし問題の提出自體は常に必ずしもしかく客觀的に行はれるのではない。殊に現在のやうに時代が成長と混亂との唯中にある時期に於て然りである。ここでは學界の共通な興味といふやうなものではなしに、より直接的な各個學者の主觀性、或は彼をめぐる具體的生活の必要が彼に出發點を與へるのである、ここではその學者を含む現實的國民、彼が屬する現實社會の關心が決定的に彼の立場の上に働きかける。このやうな具體的生活の要求から遊離し、その主觀性に於て西歐の學者と甚だしく性格を異にする我國の學者が、彼等と等しく西洋史學界の住民を以て自ら任ずることの困難は恰もこの出發點にかゝつてをるのである。それは科學の客觀性の問題とは別の問題である。

以上自分は自國他國の區別を超越して、等しく西洋史學界の一員として、我國に於て西洋史研究を營まんとする學者の立場と、これに伴ふ制限とを殆ぼ論じ得たと思ふものである。それらの學者が明治初年以來の舊き我國の西洋史學者が、多くの顧慮を彼等の内面的學問的立場について費さず、彼等の業績がもつ事實上外面上の效用性の背景の前

に、屢々外國學者の研究の模倣紹介の域を脱せざりし状態に飽足らず、自らそれら舊時の學者にとつて手本であり鉅問屋であつた外國學者と同列の地位に進出し、後者と同一科學的熱情と眞面目とを以てその職とする研究に當らんとする志は誠に尊敬に値ひするものであり、且そのやうな立場からの研究の勃興が我國西洋史學界の進歩の上に不可缺の前提要件である點を認むるに於て自分は敢て人後に落つるものではないのであるが、しかもそのやうな立場が上來述べ來つたやうな困難を伴ふこと、殊に現在の如き時代にあつては、決して外面的程度上の問題としてのみならず、寧ろ内面的に規定せられ、容易に渡り得ざる底の困難が、それら共同に西洋史學界の住民を以て自ら任ぜんとする學者を待ち設けてをること、それらの諸點については特にそれら新進の學者の一考を煩はし度思ふものである。

三

吾々の問題はそれ故に、他家の畑と自家の畑との區別を撤し、等しく西洋史學界の住民として西歐の史實に對するといふ立場のみによつては猶解決せられ得ない。しからばそのやうな立場以外に猶我國に於ける西洋史研究を内面的に意義づけるやうな立場があり得るや否や、吾々は今一度立歸つて吾々の問題を問ひ直さなければならぬ。扨て前節の末尾に行はれたあの考察は、我國の西洋史研究者にとつて特に考慮に値ひする關係を指示してをる。即現在吾々が眼前にもつやうな、現實の生活が不安定な状態にあり、從てすべての關心が現實生活の要求に集中せられるやうな時代にあつては、歴史家の出發點も常に科學としての歴史學の要求する問題といふやうないはゞ現實から遊離した問題

に止り得ず、寧ろ彼等の出發點は力強く現實の生活者が具體的に要求する如き問題によつて支配せられるのである。換言すれば歴史家は單に科學としての歴史學の研究を任務とする以上に、彼等の同胞たる國民、彼等と共に同一の社會に生活する人々の歴史的教養に貢獻すべき任務を背負はされるのである。そしてこの第二の任務は恰も我國に於ける西洋史學者にとつては特に重要な意義を有するものなることこれである。蓋し周知のやうに我國は明治初年以來西歐の文化を大に輸入し、今日に於ては吾々の生活は既に著しい程度までこの新しい文化の下に營まれてをるのである。假令現今我國固有の文化の價値を再認識し、これが宣揚をはからんとする運動が漸く盛ならんとしつゝあるとはいへ、今日既に西歐輸入の文化が吾々の生活に對してもつ意義は、吾國古來のそれに比して、少くとも表面上に於ては屢々遙かに大なるものがあるのである。殊に現在に於ては世界の文化圏は即實質上西歐の文化圏であり、その中に新に加入して、大に自己を主張しやうとする我國としては、その幸不幸は別として、大なる程度までこの文化を攝取し、これを同化すべき必要に迫られつゝあることは何人と雖も疑ひ得ざる所である。しかもこれらの新文化はその殆んどすべてが古來我國の歴史に缺けたる處のものであり、従て外部的な制度、事實的末節に至つては、これを學むで直ちにこれに模する事が出來たとしても、その運行を規定する根本の本質、その精神に至つては、猶甚だしく正當な理解から遠いのである。それ等の多くは猶佛作つて魂未だこれに伴はざるの恨みがある。従て今日の急務は、それらの輸入せられた諸文化の本來の意味、本質を今一度明らかに認識し直すこと、全體としては所謂西歐の文化、西歐主義の本質をば、その歴史的發展にかけて正しく理解することではなければならぬ。この課程を経て始めて、そのやうな輸入文化と吾國固有の文化との對立或は接觸の程度が明らかに理解せられ、單に盲目的な或は歪められた模倣ではなしに、

内面的に新來のものを攝取し、これを同化する事が出来るのである。それは我國に於ける西洋史の研究者に課せられた最も重大な任務であり、同時にそれは單に科學的關心以上に、より切實に現實的實踐的關心にかゝつてをるのである。そこではより抽象的な西洋史學界の共同問題の研究の如き任務以上に更に重要な任務として、具體的な吾國民にとつての問題、吾々の今日の生活が要求する問題の解決が、吾國の西洋史研究者を待つてをるのである。もとよりかくいふ意味は、この後の任務がよりよく遂行されるためには、先づ科學としての西洋史研究が、客觀的正確な事實的研究がその基礎をなさねばならぬこと、後の任務のためのよき學者が前の任務のためにもよき學者でなければならぬこと、これらのことを決して否定する意味ではない。しかもこの兩者の間に、科學としての歴史と教養としての歴史の任務の間に、重要な差別が存すること、殊に後の任務が現在重要な獨立の意味をもつものたることもこれを疑ひ得ない。二つの任務を事實上嚴格に區別することが不可能、或は困難であるといふ事は、決して前者のみで事足りるといふことではない。

具體的にいへば西歐の世界の歴史的事實は事實自體としては吾國民にとつて大なる關心を有しないのである、それは他國のこと、他民族のことである。寧ろ吾々が關心する所のものは、それらの史實によつて築き上げられた現在の西歐文化の本質、それらを導く價值意識、最も深き内面に於てそれらを支へる西歐主義の精神である。又西歐文化のあらゆる隅々が、その發展の絶へざる一つ一つの階段が吾々にとつて知るに値ひするのではない、それらの中特に大なる文化意識として、現在の西歐諸國民、ひいては吾國民の生活の上にならば重要な影響を及ぼすやうな要素のみがこの第二の任務にとつて興味があるのである。このやうに正しく制約せられた意味に於て出發點をとるならば、それが

西歐史學界の共通な問題といふやうなものではないこと、それは特に吾國の學者に要求せられ、彼等のみが亦それを採り得るやうな問題に關するものであることは自ら明かである。蓋しこの第二の任務は密接に現在に於ける我國民生活の事情、吾々の具體的生活の要求の上に立脚するのであるからである。一般に教養としての歴史に對する吾々の關心を規定する根本動機は二つある。一つは過去の事實を事實として保存し記憶すること、一つは吾々の生活の不可缺の要素として歴史が前提せらるゝことこれである。第一の動機は本來吾々にとつてそれらの事實がそれ自體として親密性を有する場合に限るものである、例へば自己の家族の系圖であるとか、自國民の過去の記録であるとかいふ場合に限るものである。第二の動機は吾々の現在の生活があらゆる點に於て過去の歴史の所産の上に成立し、從て吾々の過去の歴史を理解せずしては、現在の吾々を理解し得ず、從て亦明日の吾々の生活を意識的に營み得ぬといふ關係に根ざすものである。もとよりかくいふ意味は、吾々の生活の全部を歴史の中に分解し、吾々の生活の價值を歴史的相對性の中に沈没せしめ、或は吾々の生活の上に綜じて運命論的な悲觀主義的な陰影を投げかけることではない。寧ろ吾々の生活が猶内に發展の餘力を存する限り、それは絶へず新たな生活要素、新たな生活價值をその中にとり入れ、それらの内部的對立を克服しつゝ、常に新しい生活價值へ、彼にとつては唯一の、それ以外ではあり得ぬ處の生活の創造へと進むで行くのである。しかもこのやうな歴史性の克服、新しい歴史の創造への唯一の指導者は即亦歴史である。吾々が吾々の生活の中に相争ふ諸要素を夫々に理解し、所謂敵を知り己れを知つてこれらの上に打勝つ唯一の道は即歴史を通しての道である。そのやうな歴史の意義が、現在の如き西歐の——即又大なる程度まで現在世界の——文化の中にある諸要素が夫々新しい相貌に於て戰線に現はれ、互に相争ふ如き過渡的時代に於て、更には特に現在の

我國に於てのやうに、そのやうな内面的不安定に悩む西歐文化を輸入文化として新たに固有文化の上につけ加へ、本質上大に異なつたこの二つの文化を新たに綜合する必要、それらの對立を克服して、その間から新しい時代の文化を築く必要に迫られてをる如き時代に於て、大にその重要さを加へ來り、事實加へ來つてをることは現在何人もこれを否み得ぬ所である。この意味に於て我國の西洋史學研究は獨自な内面的任務を有するのであり、そこに確かに吾々西洋史學の研究に従事する者が充分考慮するに値ひする内面的な立場が存在するのである。